# Geometric Ergodicity of Hamiltonian Monte Carlo

### 竹田航太

#### 2022年11月6日

#### 概要

MCMC などのアルゴリズムにおいて生成される estimator の有効性を考える上で Markov Chain の収束について考えることは重要である. 収束性は (Geometric) Ergodicity という概念で表現されるが,何らかのノルムによる定常分布への収束性を指すものである. ここでは主に HMC に関する収束定理についてまとめる. 確率微分方程式やマルコフ連鎖,凸最適化に関する知識が求められる.

### 1 ノルム

収束定理において使われる測度空間のノルムを整理する. 現在確認しているものは以下

(1) total variaion:

$$d_{TV}(\nu_1, \nu_2) = \|\nu_1 - \nu_2\|_{TV} = \sup_{A \in \mathcal{F}} (\nu_1(A) - \nu_2(A)) = \int_A \left| \frac{d\nu_1}{d\nu_2} - 1 \right| d\nu_2$$

(2)  $\chi^2$ -距離:(これは距離ではない)

$$\|\nu_1 - \nu_2\|_{\chi^2} = \int_A \left|\frac{d\nu_1}{d\nu_2} - 1\right|^2 d\nu_2$$

(3) Wasserstein-k 距離:

$$d_{W_k}(\nu_1, \nu_2)^k = W_k(\nu_1, \nu_2)^k = \inf_{(X, Y) \in \mathcal{C}(\nu_1, \nu_2)} \mathbb{E}[\|X - Y\|^k]$$

#### 1.1 ノルム間の不等式

ノルム間に成り立つ関係については次を参照 [1, ON CHOOSING AND BOUNDING PROB-ABILITY]

例えば

$$d_{min} \cdot d_{TV} \le W_1 \le diam(\Omega) \cdot d_{TV}$$

## 2 証明にあたっての仮定

HMC の収束性を証明するためによく仮定される条件をまとめる。分布を  $\pi=e^{-U}$  と表し、ポテンシャル U について条件を課す。 典型的なものは log-concave と gradient-Lipschitz である.

#### 2.1 Log-Concave

HMC の収束において density の log-concave 性 (もしくはポテンシャルの convex 性) が必要とされる. この背景には convex optimization の理論がある. しかし, 応用上は non-convex な最適化を必要とする場合があり、HMC の non-concave density への適用の需要も高まっている.

#### 2.2 Gradient-Lipschitz

後述の通り、gradient-Lipschitz 性から density から誘導される確率微分方程式の解の存在が示される.

#### 2.3 Bounded

状態空間がコンパクトでポテンシャルが有界な時, Log-concave 性を使わず簡単に HMC の収束を示すことができる.

## 3 SDE との関係

一般に MCMC に対する収束定理は対応する SDE の離散化解のノルム収束評価として捉えることができる.

#### 3.1 Langevin diffusion

HMC の簡易版のアルゴリズムとして Langevin Monte Carlo がある. これは  $\pi$  から定められる Langevin 方程式と呼ばれる以下の確率微分方程式を離散化 (Euler scheme) したアルゴリズムである.

$$dY_t = -\nabla U(Y_t)dt + \sqrt{2}dB_t \tag{3.1}$$

[2, Durmus] によると U に関するの convex 性や gradient-Lipschitz 性の仮定の元で  $\pi$  に対する log-Sobolev 不等式や  $Y_t$  に対する状態空間の次元に依存しない指数収束性が示される. また, [Karatzas, Shreve]\*1の Chapter 5, Thm 2.5 によると gradient-Lipschitz 性から (3.1) と 2 次モー

<sup>\*1</sup> https://link.springer.com/content/pdf/

メントをもつ初期分布  $\mu_0$  に対する一意な強解の存在を示せる. さらに Thm2.9 によれば (3.1) から定まる半群\* $^2P_t$  は  $\pi$  と可逆になり、 $\pi$  を不変測度としてもつ. \* $^3$ 

#### 3.1.1 SDE **の知識**

以下などを参考にして SDE に関する知識をつける必要がある.

Karatzas, Shreve; https://link.springer.com/content/pdf/

Ergodicity for SDEs; https://www.sciencedirect.com/science/article/pii/S0304414902001503

Eponential convergence for LD; https://projecteuclid.org/journals/bernoulli/volume-2/issue-4/Exponential-convergence-of-Langevin-distributions-and-their-discrete-approximations/bj/1178291835.full

## 4 収束 • Ergodicity

Markov kernel の定義は Markov Chain に譲る.

#### 4.1 Markov kernel の表現

 $(\mathbb{R}^d,\mathcal{B}(\mathbb{R}^d))$  上の Markov Chain $(X_n)_{n\geq 0}$  を考える.この Markov kernel を定式化を行う. $(\Theta,\mathcal{B}_{\Theta})$  上の r.v.  $\theta$  を考え,これにより Chain を生成する際のランダム性を表現する.

**Definition 4.1.**  $f_{\theta}: \mathbb{R}^d \to \mathbb{R}^d$  に対して、次の形の *Markov kernel* を考える.

$$P(x,A) = \int 1_A(f_{\theta}(x))\gamma(d\theta) \qquad x \in \mathbb{R}^d, A \in \mathcal{B}(\mathbb{R}^d)$$

今, 分布  $\pi$  への chain を Metropolis-Hasting Algorithm によって構成するので  $f_{\theta}$  の形は以下のようになる.

$$f_{\theta}(x) = \begin{cases} g_{\xi}(x) \ (u < a(x, g_{\xi}(x))) \\ x \text{ other} \end{cases}$$

ここで  $\theta = (\xi, u)$   $u \sim U[0, 1]$  であり、 $\xi \sim \mu \in \mathcal{M}_1(\mathbb{R}^d)$  として、 $g_{\xi}$  は candidate(proposal) map と呼ばれる.

 $g_{\xi}$  を用いて proposal kernel  $Q: \mathbb{R} \times \mathcal{B}(\mathbb{R}^d) \to [0,1]$  は次で与えられる.

$$Q(x,A) = \int 1_A(g_{\xi}(x))\mu(d\xi) \qquad x \in \mathbb{R}^d, A \in \mathcal{B}(\mathbb{R}^d)$$

 $<sup>^{*2}</sup>$  transion kernel とも呼ばれる

<sup>\*3</sup> マルコフ連鎖については https://litharge3141.github.io/blog\_pdf/markov\_chain/markovchain.pdf なども参照

さらに,  $\pi$ , Q(x,dy) にそれぞれ density q(x,y),  $\pi(x)$  の存在を仮定すると, acceptance probability a(x,y) は次のようにかける

$$a(x,y) = 1 \wedge \frac{\pi(y)q(y,x)}{\pi(x)q(x,y)} 1_S$$

(ただし、 $S = {\pi(x)q(x,y) > 0}$ ) 特に  $\pi(x)q(x,y) = 0$  の場合は a(x,y) = 1 となる.

**Definition 4.2** (MH-type kernel). *Markov kernel P が Metropolis-Hasting type(MH-type)* であるとは以下を満たすこと.

$$P(x, A) = a(x, y)Q(x, dy) + r(x)\delta_x(dy)$$

ただし,  $r(x) = 1 - \int a(x,y)Q(x,dy)$ 

**Lemma 4.3** (MH-type の導出). 上で  $f_{\theta}$  から定義した P は MH-type となる.

#### 4.2 Exmaple

 $g_{\varepsilon}$  の例を典型的なアルゴリズムで紹介する.

表 1  $g_{\xi}$  の例

Algorithm	$g_{\xi}(x)$	ξ ~
RWM	$x + \xi$	mean zero symmetric measure on $\mathbb{R}^d$
MALA	$x + \frac{h}{2}\nabla\log(\pi(x)) + \sqrt{h}\xi$	N(0,I)
$_{ m HMC}$	$\Pr_x \circ \phi_T(x,p)$	$\xi = (p,T); p \sim N(0,M), T \sim \text{measure on } \mathbb{N}$

Remark 4.4. MALA は以下の Langevin diffusion の Euler-Maruyama scheme による離散化.

$$dX_t = \nabla \log(\pi(X_t))dt + \sqrt{2}dW_t$$

ただし、 $W_t$  は Brawnian Montion.

#### 4.3 Conditions

目的の定常分布  $\pi$  に収束するための Markov kernel P に対する条件を考える.

#### 4.3.1 定常分布と可逆性

まず、定常分布の定義について.

**Definition 4.5** (Markov 遷移核の作用).  $\mu \in \mathcal{M}_1(\mathbb{R}^d)$  に対して,  $\mu P \in \mathcal{M}_1(\mathbb{R}^d)$  を次で定める.

$$\mu P(\cdot) := \int_{\mathbb{R}^d} \mu(dx) P(x, \cdot)$$

 $f: \mathbb{R}^d \to \mathbb{R}$  s.t. 有界, $\mathcal{B}(\mathbb{R}^d)$ -可測に対して, $Tf: \mathbb{R}^d \to \mathbb{R}$  を次で定める.

$$Pf(\cdot) = \int_{\mathbb{R}^d} f(y) P(\cdot, dy)$$

また, m-step Markov 遷移核  $P^m$   $(m \ge 2)$  を再帰的に以下で定義する.

$$P^{m}(x,A) := (P(x,\cdot)P^{m-1})(A) = \int_{\mathbb{R}^d} P(x,dy)P^{m-1}(y,A)$$
 (4.1)

**Definition 4.6** (定常分布と可逆性).  $\pi \in \mathcal{M}(\mathbb{R}^d)$  が P-stationary(invariant) とは以下が成り立つこと

$$\pi P = \pi$$

また、 $\pi$  と P が reversible とは以下が成り立つこと

$$\pi(x)P(x,dy) = \pi(dy)P(y,dx)$$

**Lemma 4.7.** *Markov kernel* P が  $\pi$  に対して reversible のとき  $\pi$  は P-invariant となる.

Proof.

$$\int_{x \in \mathcal{X}} \pi(dx) P(x, dy) = \int_{x \in \mathcal{X}} \pi(dy) P(y, dx) = \pi(dy) \int_{x \in \mathcal{X}} P(y, dx) = \pi(dy)$$

**Lemma 4.8.**  $\pi$  に対して定義した MH-type kernel は  $\pi$  に reversible な chain を作る.

#### 4.3.2 定常分布への収束

次に一意的な定常分布への収束を保証するための条件を考える.

**Definition 4.9** ( $\phi$ -irriducible). *Markov kernel P* が  $\exists \phi: \sigma$ -finite measure on  $\mathcal{X}$  に対して,  $\phi$ -irriducible(既約)

 $\stackrel{def}{\Leftrightarrow}$  任意の  $x\in\mathcal{X}$  と  $\phi(A)>0$  となる  $A\in\mathcal{B}(\mathcal{X})$  に対し、ある  $n=n(x,A)\in\mathbb{N}$  s.t.  $P^n(x,A)>0$ 

**Example 4.1** (Running Example).  $\pi \in \mathcal{M}(\mathbb{R}^d)$  の density を同様に  $\pi$  と書き, $\pi$  に対する MH-type Algorithm を考える. proposal density q(x,y) は  $\mathbb{R}^d \times \mathbb{R}^d$  上正値,連続とし, $\pi$  は至

る所有限とする.

このとき、このアルゴリズムは  $\pi$ -irriducible となる.

確かに、 $\forall x \in \mathbb{R}^d$  と  $\pi(A) > 0$  となる A に対して、 $\exists R > 0$  s.t.  $\pi(A_R) > 0$  (ただし、 $A_R = A \cap B_R(0)$ ). 次に連続性から、 $\exists \epsilon$  s.t.  $\forall x \in \mathbb{R}^d, \inf_{y \in \mathbb{R}^d} \min\{q(x,y), q(y,x)\} \geq \epsilon$   $\pi(x) > 0$  として、\*4

$$P(x,A) \ge P(x,A_R) \ge \int_{A_R} q(x,y) \min \left[ 1, \frac{\pi(y)q(y,x)}{\pi(x)q(x,y)} \right] dy$$

$$\ge \epsilon \int_{A_R} \frac{\pi(y)}{\pi(x)} dy$$

$$\ge \epsilon |\{ y \in A_R; \pi(y) \ge \pi(x) \}| + \frac{\epsilon}{\pi(x)} \pi(\{ y \in A_R; \pi(y) < \pi(x) \})$$

 $\pi$  は Lebesgue 測度に対して絶対連続なので  $|A_R|>0$  であり、そのため最右辺は同時に 0 にならない.以上から P(x,A)>0 となり、P は  $\pi$ -irriducible である.

**Definition 4.10** (aperiodic). P with 定常分布  $\pi$  が appriodic とは次を満たす  $d \geq 2$  が存在しないこと. disjoint  $A_1, \dots, A_d \in \mathcal{B}(\mathbb{R}^d)$  s.t.

$$P(x, A_{i+1}) = 1$$
 if  $x \in A_i$  and  $P(x, A_1) = 1$  if  $x \in A_d$  and  $\pi(A_1) > 0$ 

**Example 4.2** (Running Example 続き). 追加の過程なしで aperiodic が成り立つ. 背理法により示す. disjoint な  $\mathcal{X}_1, \mathcal{X}_2 \subset \mathcal{X}$  s.t.  $\pi(\mathcal{X}_1), \pi(\mathcal{X}_2) > 0$  かつ  $P(x, \mathcal{X}_2) = 1 \ \forall x \in \mathcal{X}_1$  を考える.  $\pi$  の絶対連続性から  $|\mathcal{X}_1| > 0$  となるので,

$$P(x, X_1) \ge \int_{y \in \mathcal{X}_1} q(x, y) a(x, y) dy > 0$$

次に asymptotic convergence theorem を述べる. 状態空間には可算生成な  $\sigma$  代数を仮定するが  $(\mathbb{R}^d,\mathcal{B}(\mathbb{R}^d))$  はこれを満たす. 定理の証明は [3] に譲る.

**Theorem 4.11** (定常分布への収束). *Markov* 連鎖  $(T, \delta_x)$  は  $\phi$ -irriducible, aperiodic で定常 分布  $\pi \in \mathcal{M}_1(\mathcal{X})$  をもつとする. このとき  $\pi$  a.e.  $x \in \mathcal{X}$  で

$$\lim_{m \to \infty} ||P^m(x, \cdot) - \pi(\cdot)||_{TV} = 0$$

**Remark 4.12.** Theorem 4.11 は P に  $\phi$ -irriducible と aperiodic を要請するが,  $\pi$  が定常分布 となるアルゴリズム (MH-type など) を使えば大きな問題ではなくなる.

#### 4.4 Geometric Ergodicity

次は定常分布への収束の速さを評価したい. べき的 (geometric) な収束を保証するのが (Geometric)Ergodicity である.

 $<sup>^{*4}</sup>$  そうでない場合は a(x,y)=1 となり,直ちに P(x,A) が従う.

**Definition 4.13** (Geometric Ergodicity). *Markov Chain P with stationary*  $\pi$  が *Geometrically Ergodic* とは以下を満たすこと.

 $\exists \rho < 1, \exists M : \mathbb{R}^d \to [0,1]; \pi$ -a.e. finite s.t.

$$||P^n(x,\cdot) - \pi(\cdot)||_{TV} \le M(x)\rho^n$$

**Definition 4.14** (Lyapunov function, Drift condition). *Markov kernel P* に対して, *Lyapunov function V が存在する (*もしくは *Drift condition* を満たす)

$$\overset{def}{\Leftrightarrow} V: \mathbb{R}^d \to [1,\infty] \ s.t. \ \exists 0 < \lambda < 1, \exists b < \infty, \exists \omega < \infty$$

$$PV(x) \le \lambda V(x) + b1_{C_{\omega}}(x) \tag{4.2}$$

ただし、 $C_{\omega} = \{x; V(x) \leq \omega\}$ 

**Theorem 4.15** (Geometrically Ergodic Theorem).  $x \in \mathbb{R}^d$  を初期値として Markov kernel P により生成される Chain が  $\pi$ -irriducible, aperiodic であり,Lyapunov function V をもつと する.このとき P は Geometrically Ergodic である.i.e.

 $\exists \rho < 1, \exists M : \mathbb{R}^d \to [0,1]; \pi\text{-a.e. finite s.t.}$ 

$$||P^n(x,\cdot) - \pi(\cdot)||_{TV} \le M(x)\rho^n$$

**Example 4.3** (not irreducibile chain).  $U(x) = x, L = 2, \epsilon = \sqrt{2}$  の時,  $\phi(x_0, p_0) = x_0$  となり chain は not irreducibile.

**Remark 4.16** ([4]). *MH-type* について, ess  $\sup r(x) = 1$  のとき, geometric ergodicity は成り立たない.

**Example 4.4** ([4]). 以下の形の目的分布に対して, Random Walk Metropolis は not geometrically ergodic.

$$\pi(x,y) \propto \exp{-(x^2 + x^2y^2 + y^2)}.$$

## 参考文献

- [1] Alison L. Gibbs and Francis Edward Su. On choosing and bounding probability metrics. International Statistical Review / Revue Internationale de Statistique, 70(3):419–435, 2002.
- [2] Alain Durmus and Éric Moulines. Sampling from a strongly log-concave distribution with the Unadjusted Langevin Algorithm. Preliminary version, April 2016.
- [3] Gareth O. Roberts and Jeffrey S. Rosenthal. General state space markov chains and mcmc algorithms. *Probability Surveys*, 1(none), Jan 2004.

- [4] GO Roberts and RL Tweedie. Geometric convergence and central limit theorems for multidimensional hastings and metropolis algorithms. BIOMETRIKA, 83(1):95–110, MAR 1996.
- [5] Samuel Livingstone, Michael Betancourt, Simon Byrne, and Mark Girolami. On the geometric ergodicity of hamiltonian monte carlo, 2018.
- [6] Oren Mangoubi and Aaron Smith. Rapid mixing of hamiltonian monte carlo on strongly log-concave distributions, 2017.
- [7] Arnak S. Dalalyan. Theoretical guarantees for approximate sampling from smooth and log-concave densities, 2016.
- [8] Gareth O. Roberts and Richard L. Tweedie. Exponential convergence of Langevin distributions and their discrete approximations. *Bernoulli*, 2(4):341 363, 1996.